

ときの玉手箱

博物館からのメッセージ



第92回

夜桜 — 能装束・舞衣 —

この季節になると、きまつて満開の桜が、ニユースをにぎわせ、本格的な春の到来を告げます。日が暮れるとまだ肌寒い時期ですが、桜が開花したら、じつとしていられません。

しかし、桜への思い入れということでは、どうも私たちより昔の人々の方が、きめ細やかだったのではないか、と思われる節があります。

江戸時代には200以上の品種が知られ、しかも絵画では、専ら桜だけを描く「桜画」というジャンルさえありました。そして、「花狂い」「桜狂い」とも称される桜に執着する人々がいたのです。彼らの理想とするところは、平安時代後期の歌人西行（1118～1190）でした。

ねがはくは 花のしたにて 春死なん

そのきさらぎの 望月の頃

（『山家集』）

という有名な歌に象徴されるありようです。

しかし注意しなくてはならないのは、西行の時代の人々は、桜を愛でるだけでなく、現在の私たちとは別の思いも桜に抱いていたことです。それは、この歌に端的に表れているように、桜と死後の世界とが密接に結びついていたところにあります。

一例を挙げると、京都の北野天神社では、桜の「花の下連歌」が興行されました。



▲能装束・舞衣 江戸時代（彦根城博物館蔵）



部分の拡大▶

ぜ、桜の下で連歌なのか。それは、花をつけた桜を通じて、この世とあの世との間に通路が開かれると考えられていたからにほかなりません。満開の桜の下で連歌を楽しむことで、霊を慰撫し、この世に幸いをもたらそうとしたのです。

さて、ここに桜をあしらった能装束があります。地色はつすい水色、そこに銀糸で桜の折り枝を散らしかけます。江戸時代後期の、なかなか魅力的な一領です。現在の私たちの持つ華やかな桜のイメージからはほど遠い、単色に近い淡い配色なのが意外です。

夜桜なのでしよう。それもライトアップされた桜ではありません。

星明かりという言葉も美感できないほど、現代の夜は明るくなっています。かつては、百鬼夜行の言葉があるように、夜は暗いものと決まっています。人間が支配する昼とは異なる世界ととらえられていたのです。

その闇夜を照らすのが月明かりでした。西行の歌には「望月の頃」、すなわち満月のころとありました。夜桜なのです。

この舞衣の桜は、人工の篝火に照らし出された妖艶な桜ではなく、月明かりの中にほのかに浮かび上がる清楚な桜といえるでしょう。

（彦根城博物館学芸員 齋藤 望）

彦根城博物館の常設展示「幽玄の美」（4月9日（金）～5月11日（火））に展示します。